彼方(かなた)へ

つりたくにこ　未発表作品集

青林工藝舎

彼方へ
つりたくにこ　未発表作品集
青林工藝舎

彼方へ

つりたくにこ 未発表作品集

青林工藝舎

ISBN4-88379-084-3 C0979 ¥1000E

定価（本体1000円＋税）

青林工藝舎

限定千部発行

彼方（かなた）へ

つりたくにこ未発表作品集

青林工藝舎

彼方(かなた)へ
つりたくにこ未発表作品集

目　　次

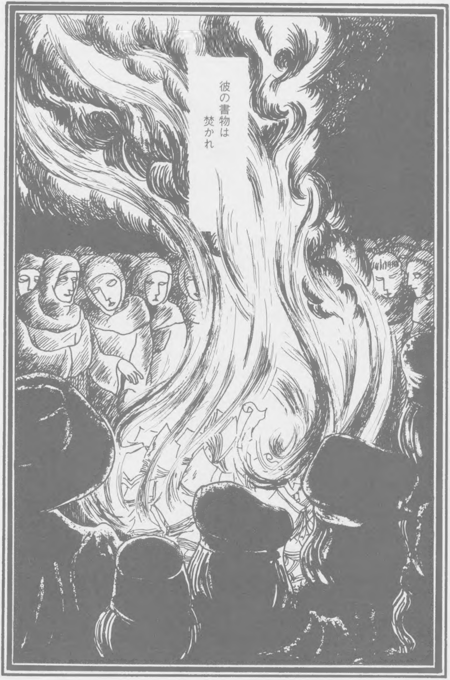
彼方へ／3
住人／45
無題／67
李さん一族／83

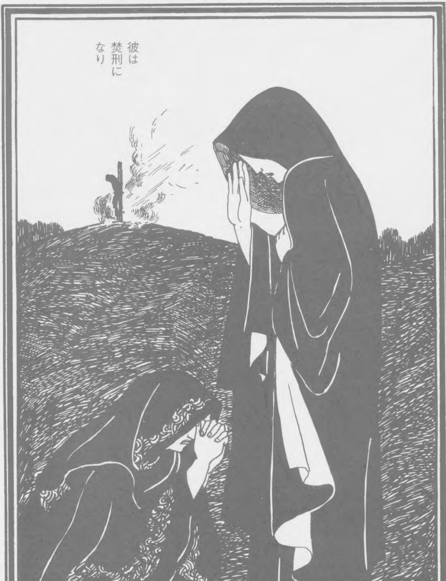
琥珀の中の歯車——つりたくにこ断章：高橋直行／91
収録作品解説／98
つりたくにこ年譜／100

彼方（かなた）へ

Ⅰ部

ドイツ農民戦争…
これは
そういう時代に生きた
青年二人の
物語である


彼の書物は
焚かれ


彼は焚刑になり

彼の灰は
ライン河に
投ぜられた

師よ—

師よ！
あ｜夢だったのか……

また指に
生臭い
感触が

悪い夢

この臭いのせいかも知れません

風向きで広場から漂ってくるこの臭いか…

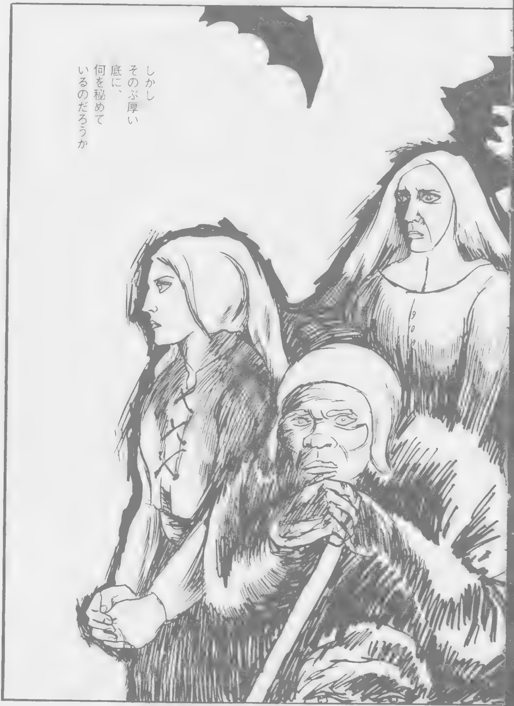
今日は広場で
赤貧修道僧が五人、
女が一人　焚かれました

あの白い手
それまでは
糸を紡ぎ
赤児を
あやしていた
だろうに…

その光景を子供までつれて見物にくるやからがいる

自分達
だけは
安心だと
思っているのだ

彼らを見つめる
農民は無表情だ


しかし
そのぶ厚い
底に、
何を秘めて
いるのだろうか

現世は
悪魔が支配している

悪魔
ですって

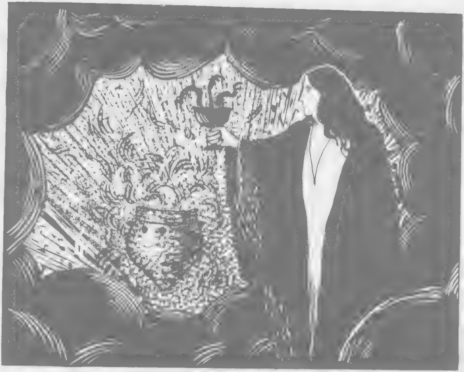
彼らを焚いたのは
人間の手

現世こそ
堕落天使が
落ちたという
地獄なのか

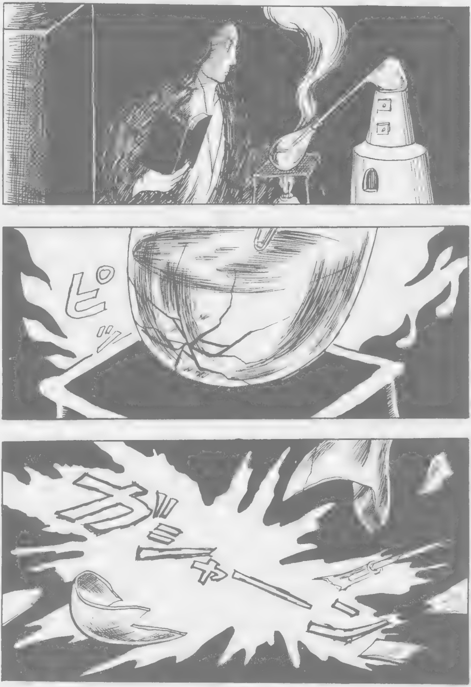
そうかも
知れません
…………
しかし私は
神と同様
悪魔も信じては
いない

しかし
師よ!
無益な話
はよそう
実験に
入ろう
今日は

我が世界
には
他の何ものにも
まして
崇高な
鳥がいる



卵の事をよく
知り、
ぎらぎら光る
剣でそれを
切れ!

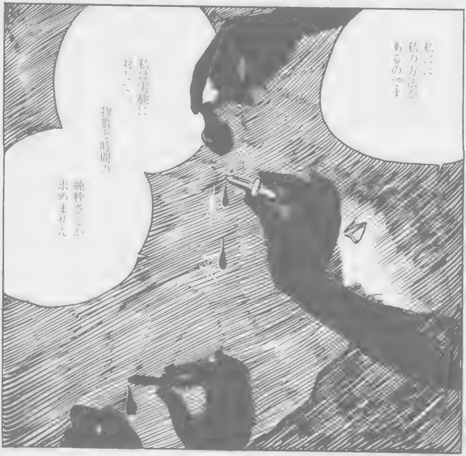

ピッ
ガシャーン

失敗か……

お前は金が出来ると思うか……
……

純化された物質、純化された精神、二者の結合が金を創る

しかし、おれは物質だけの価値にいそしんでいる

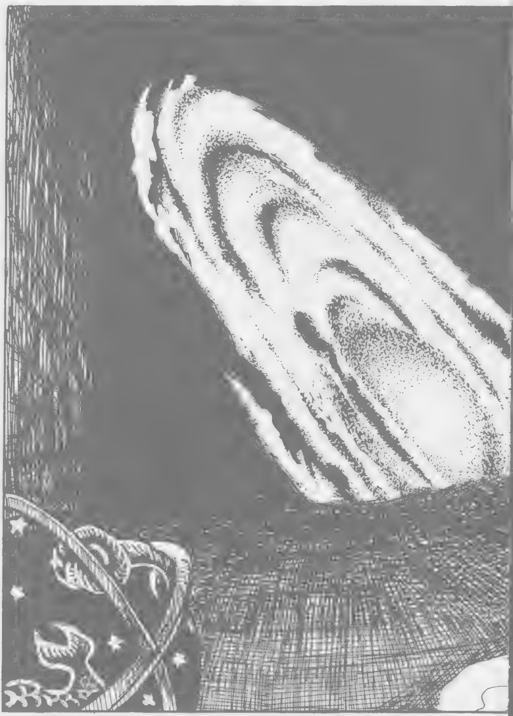

私には私の方法があるのです
私は実験に対して物質と時間の純粋さしか求めません

精神に ついては…… もっと別な次元で 純化されるものだと
そう考えて おります

赤の
過程、
黒の過程、
しかし……

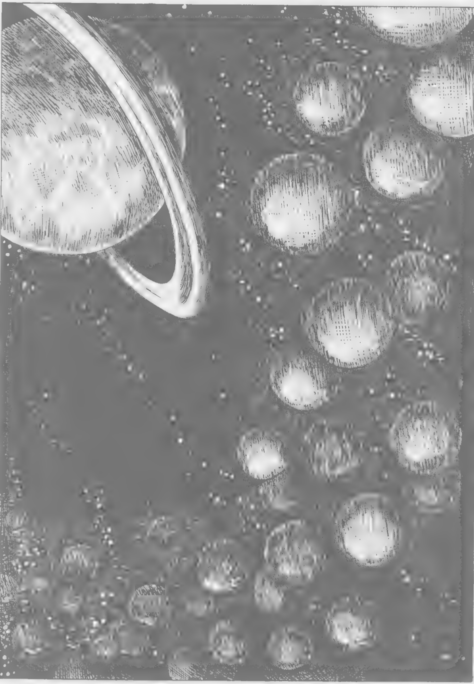
師は
至福千年を
信じて
いるのだ
ろうか?

私には視える…
信じられぬ程の
長い時を経て



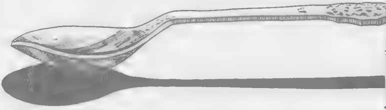
その「時」が来るのが視える！

しかし、それは永遠の「彼方」だ……いつ終わるとも知れぬ永遠の闇から……



しょせんは　むなしい　うたかた……
私の夢でしかないかも知れない……

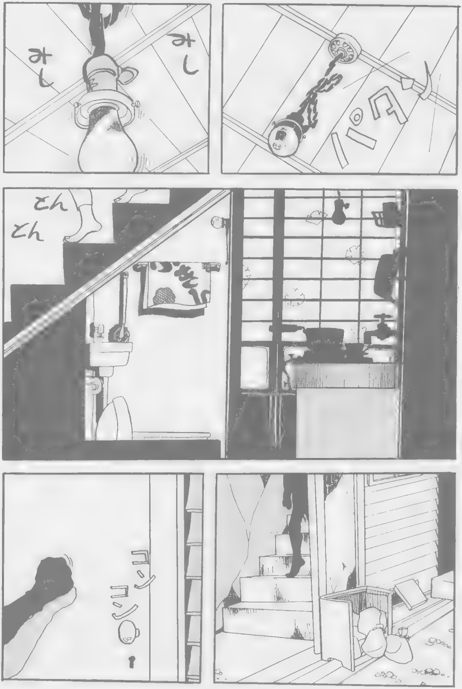
未完



住　人

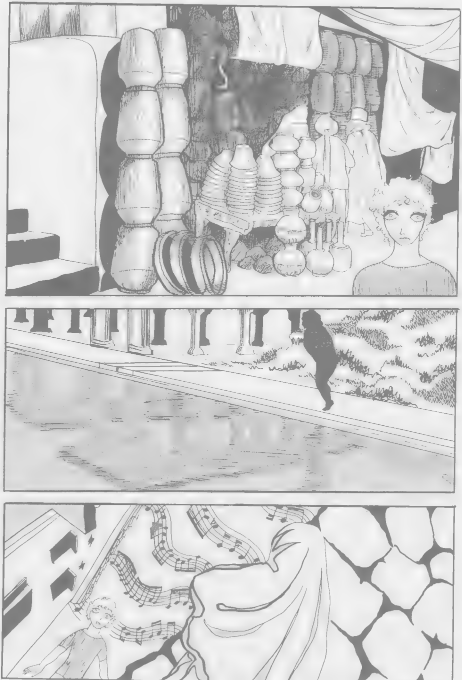
柚木 直志

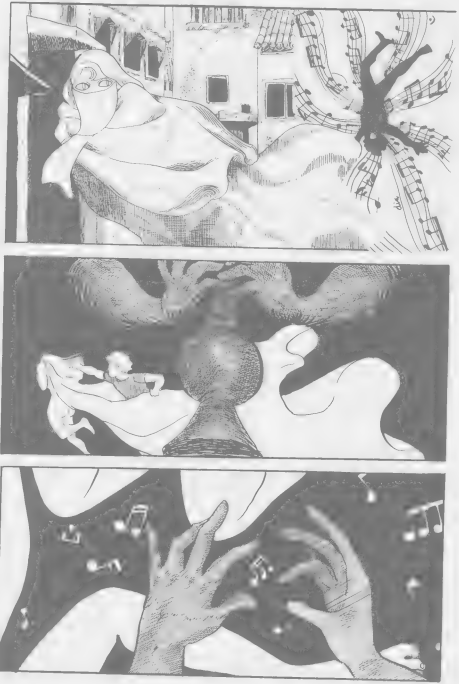
私はその日、とても残忍になっていたので、台所を這っていた小さな蜘蛛に……
熱湯を小匙三杯掛けました
その小匙でコーヒーに砂糖を三杯入れ美味しく戴きました

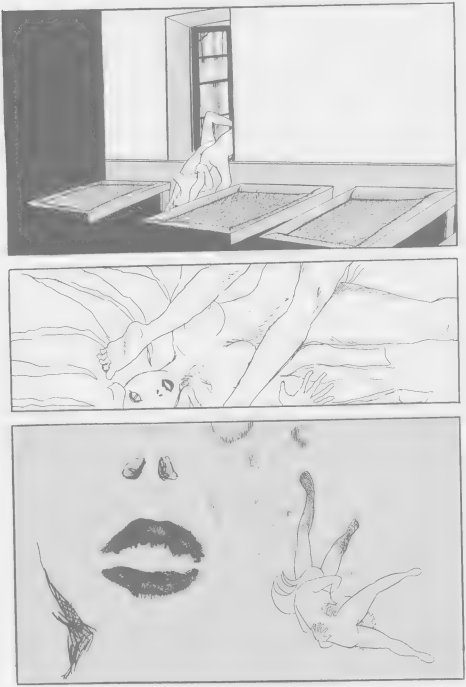

みし
みし
とん
とん
コン
コン

あの……コーヒーを入れました
ね
昨日の夜、女の子を連れて来たでしょう
騒々しくて眠れなかったわ
やるんなら静かにやって頂戴
すみません
ぱたん

あ！
此の音楽は
中近東の
俗謡ですね
石の白い
粉が舞っ
ている
……

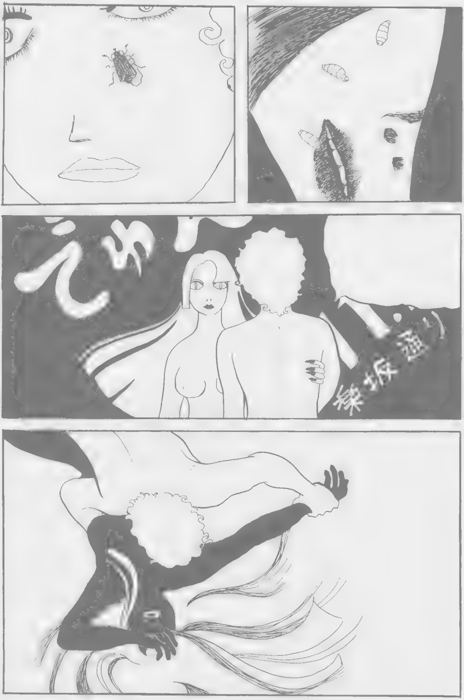


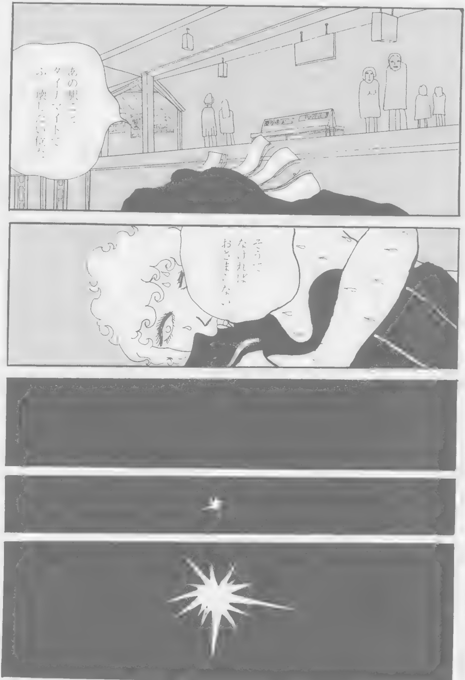




波だ
髪よ！
星空
草原
屍

キドカラー
3
1
11
飯田橋駅にあるデュエットと言う喫茶店の広告に描かれてあるべいとーべんの顔を見る度に僕はむかつく
別にべーとーべん ではなく、描かれてある顔 そのものの醜悪さ、愚劣さ加減に
痴呆
邪気のなさ
殺したくなる顔



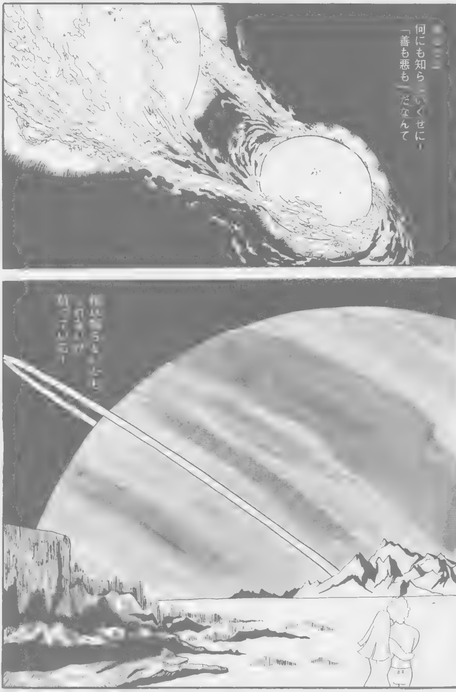

あの駅ごとダイナマイトでぶっ壊したい位だ
そうでなければおさまらない

があああんんっ

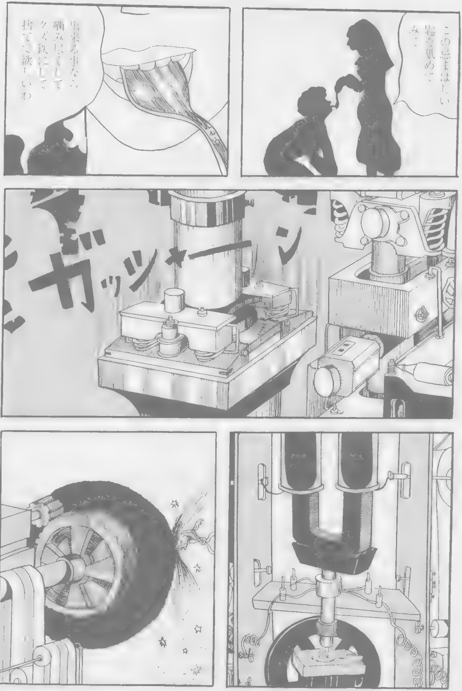
ずー ずー
その小匙ー
げーっ

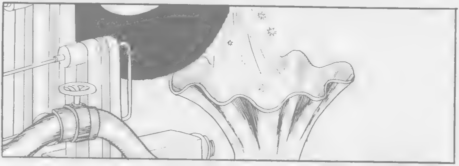
宇宙に人間の住めそうな星が現在何ら発見されていないのを分かりませんか
しくしくしく
ねえ君、僕が何か悪い事したの
図々しい
勝手にあなたの格利を抵けないで頂戴!

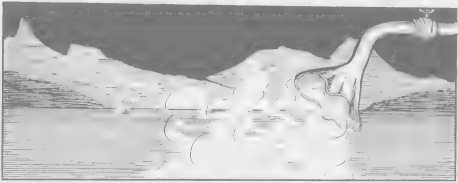
あなたか私に何か出来る
二度とそんな事を言ったら承知しないからっ!
だけど、君は僕に善も悪も施してくれますよ
すみません
ふぁあ
そんな事、私の知った事じゃないふぁあぁ


何にも知ら いくせに！
「善も悪も」だなんて

わっはっは、
ははは!!!


この忌まはしい足を舐めてみて
出来る事なら噛み尽くしてクズ鉄にして捨てて欲しいわ
ガッシャーーン





私の屍体が
浮いていた

私の体内には小さな蜘蛛がいて普段は奥深く棲息しているんですが時にその手足が皮膚のすぐ下を動き回るのです
何時か殺してやります

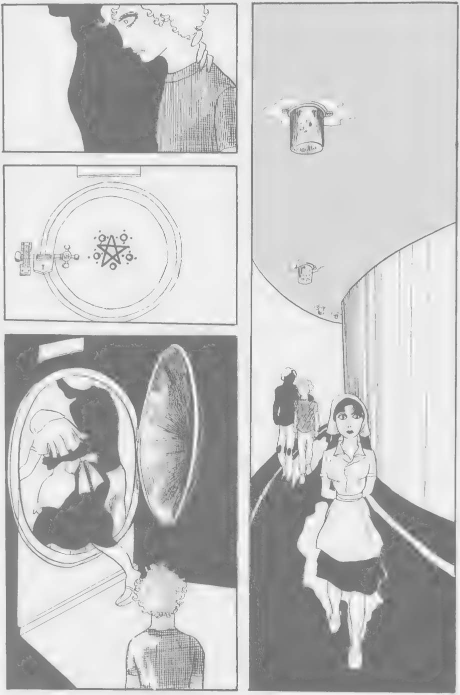
完

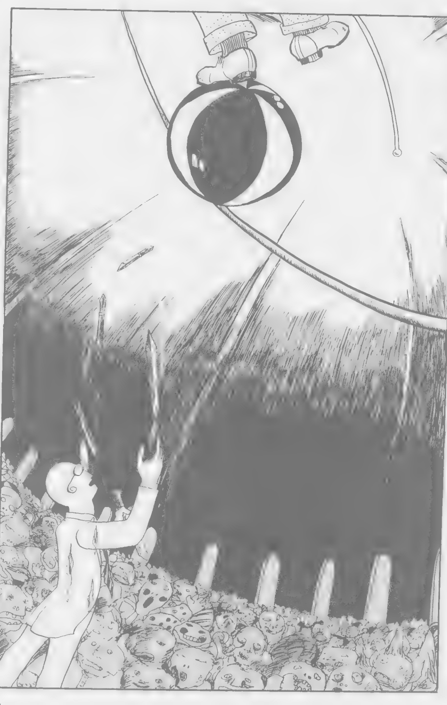
1969年8月作品

無題

食堂利用法＊
食券は各自ネームを入れて
に入れること
朝食 11：00～1：00まで
夕〃　4：00～6：30まで
に必ず済ませること
外来者は事務所で食券を
入すること
販売日　日、水曜日
の他
こんにちわ
友人をつれて
きたよ

あなたが きてくれて とても嬉しいわ
あんたたち HOMOみたいね
昨日から「新アルマシロ」開店でコロコロシテルの おもしろいショーをやっているから あとで案内するわ
そうだよ 僕たち 結婚するんだ
ワッハハ ハハハ
コーヒーでも 飲んでて ちょうだい





たいくつだけど、わりあいおもしろいショーね

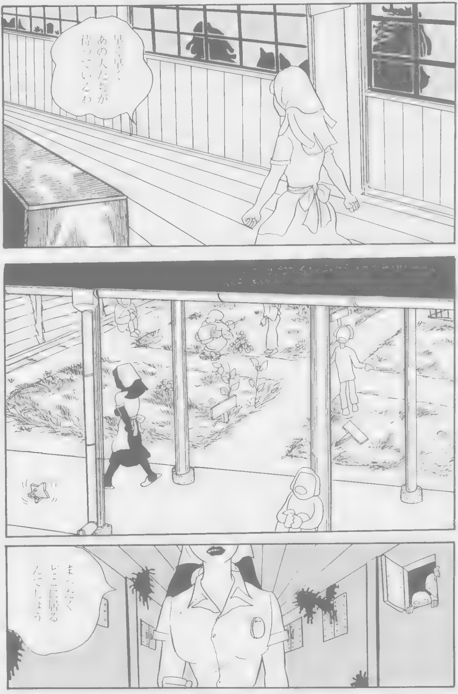
あっ 時間だからもう行かなくっちゃ
もうすぐ夜食で このショーは終わるの
すんだら社員食堂の64番テーブルで待っていてね
明治チョコレート
本日の
あっ 今日はいつものまずいチキンライスと違う! 半熟卵入りのホワイトソーススパゲッティだーっ!
ブラボー

それに
人が多すぎ
つくれないんです
もう配給時間は
終わ たので…
婦長さんに
尋ねて下さい
卵入りホワイト

多分第三棟だと
さあ…とにかく
ローカをどんどん歩いて
0000

あのドアは
おまは開く
のよ
でも数少
ない
あの男が
自動車とドア
にはさまれて
つぶれるのが
見られるわ

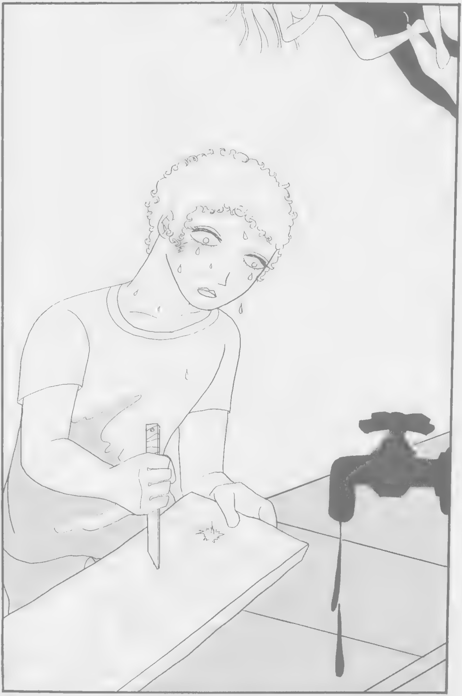
チッ!
ふん!
地学室


早く早く、あの人たちが待っているわ
まったくどこに居るんでしょう

あ…婦長さん
規則厳守
わかってます あなたの昼食は もうないんです
カラカラ
カラカラ
これでパンでも買って二番の映写室でたべなさい
でも私は パンが食べたい

私は
ホワイトミートが
食べたいの
それに
食堂ではあの人
達が待ってくれて
いるのよ
則厳守
規則に不満
言いなさい
私は
この机から
一歩も動けない
私には規則
は破れま
せん
あたしは
何も無理を
ただホワイト
ミートを
食べたいの
それに
映写室は
真っ暗で人が

ねえ
アルマジロって
こう書くのかい
うん
僕は彼女のために
それをこの木切れに
彫りつけよう
!
ねえ
アルマジロの
「ロ」という字は
これでよかった
のかなァ



完

1969年9月作品

（続・それから）

李さん一族

つぎ宛春

何事もおこる
ことなく静かな
日々をすごし
ていた
ドスン
タイコンは
実にみごとに
育っていた

今日はめずらしく
李さん一家が
庭、出てきた
兄さん
いらっしゃい
ガラ
ガラガラ
私の兄です
たった一人の
兄弟です
李さんは
そう言って
大八車を引いて
きた男を紹介した
なかなか
ええ家やんか
彼の奥さんらし
いでっぷり肥っ
た女がそう
言ってジロジロ
まわりを見わた
した

寒かったでしょう
さあはやく
家具を家の中へ
ほんなら
そうさせて
もらいまひょか
僕は別に気にも
とめなかった
ダイコンを抜くのに
夢中だったのだ
気がついた時は
日がくれかかって
いた
おまけに
雪がふり
だした

僕はダイコンの収穫にホクホクしながら二階へかけあがった
コン
?
おどろいたことに彼の兄さんの家族は僕の部屋にいたのである

ほ、なあ、けに
とられていると
奥さんが出てきて
タイコンをひったくり
サッ
かわりに僕の
荷物を投げて
よこした
僕は事態がよくのみ
こめなかった
ボイン

彼らは（ちっちゃな子供までが）声を揃えて「さようなら」と言った

つげ先生の寛大なお心に感謝いたします　　つりたくにこ

琥珀の中の歯車

つりたくにこ断章

高橋直行

つりたくにこ　50年・4歳

くに子は三つの名で呼ばれ、自分では唯、Kとだけよく記していました。
Kは1947年兵庫県高砂の漁師の家に3人姉妹の長女として生まれました。
小さなKは家の前の宮で一人遊び、今もある不動の石によじ登り、精霊の雨上がり、虹や透いて行く緑の脈、花の冠に思わず声を上げ、下校時には、貨車の重みに揺れくらむレールの踏切や、小堂や船板塀のある道筋、なくなったりあったりする路地を抜け、『秘密の花園』をのぞいて帰りました。
寝入るまでの、眼下で次第に明瞭に精微になって行く銀河や湧水に舞う砂、樹脂に捕えられた虫の羽音。
それは好奇の眼で世界を見回しながら、やがて、居所の無さを感じる子。手を差し出して待ちながら、違う自分になるのではと怯える子。『R』はその時、10歳でした。
点けられた電球の眩しさに、借りて来た本から顔を上げる。面影に既にあの終生変わらなかったものが顕れていました。
具合の悪い時期があったのですが、Kは「目が本当に奇麗な」至福のおきっちゃんや鉱石を採集する女学生、又、町内の『ディオゲネス』と会い、F孝子と出会いました。
『世界を巡る美少女2人』は騒がしく漫画を描き、Kは投稿し、一夏、幾人もの人を訪ね、批評してもらい、66年FとKは高校を卒業するや、あわただしく上京しました。
神楽坂、大泉と移って、2人は『生きるための闘争』。『あがき』も何の、『福の神』など知らず掃き出し、朝の新宿駅で体操。
Kは裁判所には勤めず、漫画を描き、動画で働き、一時、助手、そして「こんなことはロボッ

トがすべき」茶店『オルゴーネの箱』のドア嬢。
東荘に訪ね来る人もいて、幾人かの人をKは知り、『溝』を、少し違う『音』を感じました 何より自分に容赦の無い、嘘がつけないKだから。
小説ブロックハウスで感じた闇と等しい夜の濃さ 虫眼鏡で見る、不鮮明な印刷でのボッシュの夜火事や粗雑な写真版でのルドンやゴヤの銅版画の中の漆黒の内なる照度 煙草の灰落とし、線走らせながら読んでいたのもこの頃でした。そして、見続ける鮮やかな"凄い夢"と眼に焼き付く紅炎絡まる連星。
島へ、山上の寺の大広間やつぶて打ちつける外ヶ浜、海上、又、島へ。渡島、隠岐、見島、Kは思い立っては即、旅をしていました。
図cx—1で、邪悪な眼の森や深淵らしき穴、『災難』、塔、大空の滑稽な表象に気付く風無く三圃の草地を、江南の田園を歩むのが、写真M—31で、フェリーニの"道"の若者、僧形、フェルディナン・セリーヌ、サンイシドロ巡礼団・行、柿衣笠着の衆、スガル、観音と呼ばれた江口の女、メディアと呼ばれたコルキスの女、ミハイル・ブルガーコフ、墨徒らに混じって、半ば顔隠れているのがKです。
68年、混乱と雑踏の中で、西部池袋駅の改札口で、僕はKと会いました。「遅い、来ないと思った—
Kは『バラッド』口ずさみ、錬金術の黒の過程に勤しむ それまで跳梁していた赤い黒い不吉な仮面は『アクロバット』へと変容し、Fと別れ移った田無の清風荘の漆喰壁に若い女が描かれました 火照る様に、溌剌としたその顔、兆候が、突然の高い発熱がありました

『夜が』、暗闇に吹く風が、微かに歌声を、ものが壊れる音や人声を運び来るのを『彼等』と共にKも聞きました。

69年11月、六郎や青蛾、『Money』や『Max』がいたはずの街を離れ、Kは洋品店アガヤの店員。

隣には『支那陶器店の猫』。木造のガウディ、緑に埋もれる暁医院が空想の下宿先でした。

72年にKは僕と結婚し京都に移り、半年後、発病しました。元田中での最初の入院の経験が『憂子の日々』でした　SLE、全身性エリテマトーデス。自らの抗体が自分自身を攻撃する、狼の名が付く疾患。

それでも寛解期があり、Kは公設市場での買物途中に、稲荷詣での舎人の重方や抱朴子を上梓したばかりの葛洪老師と会えたり、『花嫁とその弟子』や奇しく素敵な二人連れを見掛けたり、木津の川原を単車で『空は青空雲一つ』と飛ばしたりもしました。

Kと金色の子に代わる爬虫類の緑の眼をするチビ猫と連雀負ひ京師に通ふ夫が二軒長屋の借家の『住人』　身を包む穏やかな光があり、執拗に続く一連の夢がありました

77年に急激な憎悪が来、高砂市民病院で眼を開ける力も無く横たわるKの内に、『女』が、意思が、ナスターシャと僕が名づけた人格が、子のKが、『静』が現れ、蘇生が、非現実が、不透明があり、消え止んだものがありました

Kの退院と入れ替わる様に『どんぐり』が居なくなり、現実の粗い地平に立ち戻って、実生の苗の葉隠れで一つ蛹化したものがありました

病床で、富田病院や宇治ユニチカ病院で、Kは再び描き始めました　『六の宮』本の口絵も、『フ

ライト』も、ガロの表紙も、握力の殆ど無い手で描かれました

全身の病変に、衰弱に、それらに倍する憔悴に剥ぎ取られ、裸形で、心さへ透いて、しかし、弁の異常による特有の心音は共生を鼓ち続け、僕の徒労を何よりも案じ恐れたのです

夕されば、天井の灯と人の営みも相も墨染の大路　還元の夕刻　片身にまどふ草深の『帰路』の、たづさひたどるひぢの空路の、夜々夜を越え、朝されば、目に染む、屋上の野にたたずむ白衣　暁の炎に彩られる　彼女の黙視よ　日々への、昏い西空の虹彩よ

8年の内の幾度もの危機にKは耐えました　第一赤十字病院での透析を終えて、Kは午後の大気の青い沈殿に溶け入り、韓の鼓のゆるやかな音の遠くなる束の間の眠りの中　胡蝶花の細道があり、苔の上の露玉が写している切通しがあり、踏み入った光景の古層と思える異なる光の感応が続き、色彩の中に突入して行く加速があって、色彩だけの、ついには深化する群青と妙なる朱だけの空間の奥行、

Kの願いを聞き届けた微の光暁があり、薬師湯の窓辺での手の平をぬくめる光華もありましたしかし、84年10月、透析中にKは不意に昏迷し、それから、自分の異変をとても気に病むことになりました　Kは、今までのままではいけない、何処かが間違って来た、違う全うすべき方法があり、変わらなければいけないと捉え、それは最期の凄烈な暗闘、声すら立てぬ死闘となりました。

囲みの様相が変り、死地が見えて来ていたのを、眼ざしと妄を、繭が黒退したのを、絆が残酷に働くことを、切られたこぶしの白の一輪を、境界線を、献身を、やがて、Kとの一切が逆転す**ることを僕だけが分っていなかったのでした。**

12日まで食事を作り、85年6月14日、幾時間か前、声掛けられ見送られた者は瞳を見開き、"心臓はもう自力では血液を送り出していない"のでした

僕の同意で、Kの臓器は献体されました。

表現した者はその作品で知られるべきでしょう。そしてKも不本意でしょう。それでも敢えて書こうとしたのは、少しでもKを知っている人に、その人の中のKに、僕と過ごした消息を、密かに伝え送りたいと思ったからです。

発表された作品の他、『彼方へ』等、一枚画をも含め数十点と短編童話集『北斗七星と海蛇』が残りました。

描くことのできなかったプロットは大小百余編で、『琥珀の中の歯車』もその一つです。

その後、Kが逝って15年余りを経る間に、『北斗七星と海蛇』は、香田さんの手を煩わせることになったのですが、88年に自費出版され、浅川氏の尽力で、はざまくにこ名での作品も数点見つけ出されました。

今更ながら、「私には漫画しか無い」と言ったこともあったKの黙々と打ち込んでいた熱意とその時間を思い出します。

解説・つりたくにこ年譜

71年　京都の実家の前で

収録作品解説

斧田 小

本書に収録された作品は、68年から72年にかけて描かれたが、あるいは描き始め、またあるいは、なんらかの理由により現在まで未発表となっていたものである。作品が描かれた時点では、著者はまだSLEに罹患していなかった。

「彼方(かなた)へ」1972年〜?

本作品は、72年にもともと描き下ろしの単行本として京都の小さな出版社から出版される予定があった。それまでの作品とはタッチも異なり、著者自身、新しいことに挑戦しようとする意欲が画面からも十分に感じられる。しかし出版の話は立ち消えとなり、当初から部分的に構想されていたと思われる本作品は、完成されることはなかった。ただし、出版の話がなくなってからも、著者は本作品に対して思い入れがあったようで、原稿とは別にコピーを残しており、コマ割りが残っている。コピーを見ると、本書に収録したものとは枚数やセリフが微妙に異なっており、72年の初期バージョンからその後相当な期間をかけて、数回に渡るリテイクが繰り返されたと見られる。完成を見なかった第二部以降を含め、ワラ半紙に描かれたコマ割りも残っている。よく見るとセリフに何度も推敲のあとが認められ、中にはほとんど筆圧がない状態で書かれたものもある。このことから、著者はかなり晩年に至るまで本作品を完成させようという意志があったことがわかる。原稿はそれぞれ大きさが異なり、著者自身による通し番号が数カ所に振られているが、それぞれの通し番号が必ずしもページ数と一致していない。このため、頁の順番は残されたコマ割りやメモを参考に、判断した。72年は著者が高橋と結婚し、マンガ作品は確認されていない時期にあたる。SLEに罹患する直前で、体力もあり、描線には緊張感がある。未完ではあるが、様々な可能性を感じさせる作品。

「住人」1969年8月作品

田無のアパートで暮らしていた時期の作品。この時期、著者の作品は初期のドタバタから観念的な作風に移行してきていた。しかし「ガロ」編集部内ではこうした著者の作風の変化が好ましくないように思われたのか、描きあげたものが不採用に終わることが多く、そのため、著者は本作品で、ペンネームを別人の、柚木直志に変えることを考えたようだ。吹き出し内の手書きのセリフも、つりたであることがバレぬように高橋が書いている。次に収録した「無題」にも共通する点として、絵柄にも注目したい。それまでの著者の作品とは違った、リアルで肉感的な女体のフォルムを表現しようとする努力が感じられるのだ。こうした指向性は同時代の女性作家の中では極めて稀な例だろう。著者はこの作品を高橋の協力で描きあげ、「ガロ」編集部には面のわれていなかった高橋が「柚木直志」として原稿を持ち込んだ。別人であることがバレるのではないかとびくびくしながら高橋が取り出した

原稿を見た編集長・長井勝一氏、編集部で原稿を預かったものの「この作品は結構だが、君がこの先なにを描きたいのか、それが見たい」と掲載はしなかった。以降十余年に渡り青林堂で預かりのままとなっていた本作品は、のちの編集部員につりたの作品であることをあっさり見破られ、原稿は高橋のもとへ帰り、紆余曲折を経ての今回の収録となった。なお、79年発表の同タイトルのつりたの作品とはまったく別の作品である。

「無題」 1969年9月作品

「住人」からわずか一ヶ月後に執筆された作品で、キャラクターの造形も共通している。不条理な会話によって進行するドラッグ・ムービーのような作風はいかにも60年代後半のサイケデリック感覚が濃厚だが、今見ると逆に新鮮に感じられないだろうか。なお、念のために記せば、本作品は擬音の描き文字や一部の絵柄が鉛筆描きのままで、完成原稿ではない。それらの部分はデジタル処理によりデーター上で下描きをトレースしてある点をお断りしておく。

「李さん一族」 1968年夏以降?

つげ義春作品「李さん一家」のパロディ作品として、著者は「それから」という作品を発表したことがある（「ガロ」67年9月号。ペンネームは本作品と同じく「つぎ宛春」）。本作品は「それから」のさらに続編というべきもので、編集部によっていったんは写植まで貼られていたものの、なぜか未発表に終わった。また、本作品の原稿用紙は水木プロのそれを使用している。著者が水木プロでアルバイトをしていたのが68年の夏の短い期間だったことから類推すると、執筆時期は68年夏以降となり、「それから」から約一年の間をおいて執筆されたことになる。「李さん〜」でつげ義春は吹き出しと説明文の中間のような尾のない吹き出しを多用しているが、本作品でもそのスタイルが踏襲されている。「ガロ」ではこの他にも、やはり「李さん〜」のパロディ「みなさん信じて下さい」（堀口寿美・72年5月号）が掲載されており、「李さんのラストシーンが与えた衝撃の大きさが伺える。

「琥珀の中の歯車」

解説の解説のようで変かもしれないが、少し説明が必要だと思われるので書いておきたい。85年につりたが亡くなり、「ガロ」で追悼特集が組まれた際、長井勝一からつりたの夫の高橋へ原稿依頼があった。高橋は試みたものの締め切りまでに書きあげることができず、掲載にはならなかった。その時の文章を大幅に改稿したのが「琥珀の中の歯車」である。文中に登場する『』内のタイトルはそれぞれつりたの作品からとられており、未発表に終わった作品のタイトルも多い。他に一つだけ説明を加えておくと、文章の10段目に出てくる「Kは裁判所には勤めず」という一節は、つりたの当時の状況と関連している。つりたは高校卒業前に裁判所に勤め、公務員資格を取っていたため、上京後はそうした仕事もできる手はずになっていた。しかし実際は裁判所には勤めず、藤野と二人でアルバイトをしながらマンガを描いている。このことから考えると、つりたが資格を取ったのは、あるいは上京の理由として両親を欺くためだったのかもしれない（?）。

つりたくにこ年譜

含／全作品・関連記事リスト

（作品リストは【掲載誌発行年月号　作品名「掲載誌名」／頁数】で表記。ただし、同一誌で執筆の場合は2作目以降出版社名省略）

1947年

10月25日、兵庫県高砂市の漁師町・東宮町に3人姉妹の長女として生まれる。本名・釣田邦子。父・敏、母・とし子。幼いころから読書の好きな子供だった。

1960年

4月、市立高砂中学入学。同じクラスだった藤野孝子と親しくなる。「少年マガジン」「少年サンデー」「少女フレンド」などの大手マンガ誌をよく読む。同時に貸本漫画を読みはじめ、水木しげる、白土三平、平田弘史、さいとう・たかをなどを愛読。創作も始める

1961年

11月、貸本誌「街」（セントラル出版）57号、第43回新人コンクールに五席入選

1963年

4月、県立高砂高校入学。学校の成績は学年でもトップクラスと優秀だった。SF小説をよく読み、「SFマガジン」主催のコンテストにショートストーリーを応募し、入選（時期不明）。

お気に入りの作家、あすなひろしのもとを訪ねる（高校1、2年頃か？）。

このころから本格的にマンガ家への希望を抱きはじめ、友人の藤野孝子と二人で高校卒業後に上京する計画を立てる。アルバイトをして上京の資金を貯める

1964年

「週刊少女フレンド」（講談社）の講談社新人まんが賞に応募するが、落選。また、夏休み（冬休みか？）にアルバイトを兼ね上京。石ノ森章太郎や手塚治虫のもとを訪ねる。「少女フレンド」編集部にも原稿持ち込みをするが、編集部一専属のシステムに落胆。この年、「ガロ」が創刊された

1965年

「ガロ」誌上での白土三平による新人募集の呼びかけに応え、原稿を持って上京。採用となり、「ガロ」9月号でデビュー。

9月　人々の埋葬／神々の話「ガロ」青林堂／8P

1966年

2月、高校卒業。卒業式の翌日、藤野孝子と二人で上京。神楽坂に四畳半一間のアパートを借りる。食事はパンの耳にマーガリン。大泉学園の東映動画の下請けでアルバイトが決まり、藤野と二人で仕事場の近くの東荘に引っ越す。

3月　風と共に去りぬ「ガロ」／7P
4月　狭き門「ガロ」／18P
5月　福の神「ガロ」／23P
7月　レ・ミゼラブル「ガロ」／11P
8月　所行無常有響「ガロ」／15P
9月　星のかけら「風車No57オオトモヨシヤス長編特集号」若木書房／41P※PN＝はざまくにこ
10月～12月　宇宙人ペロ「別冊少女フレンド」講談社／全8P※PN＝はざまくに子
10月　ナンセンス「ガロ」／16P
11月　女「ガロ」／24P
11月　星からのお客さま（描き下ろし長編単行本）若木書房／ひまわりブックNo.341※PN＝はざまくにこ
12月　こんな話「ガロ」／17P

12月　アコと3人のお客さま「風車No.60」若木書房／42P※PN＝はざまくにこ

1967年

「ガロ」に作品を発表するかたわら、前年の暮れより若木書房や「少女フレンド」で少女マンガを描くようになる（はざまくにこ名義）。また、別名義でエロマンガも描く（掲載誌・作品未確認）。アルバイトを辞め、マンガに専念。

1月　雪の降る日（描き下ろし長編単行本）若木書房／ひまわりブックNo.349※PN＝はざまくにこ
2月　アンチ「ガロ」／12P
3月　生きるための闘争「ガロ」／12P
3月　風船の旅（描き下ろし長編単行本）若木書房／ひまわりブックNo.357※PN＝はざまくにこ
4月　あがき「ガロ」／10P
5月　赤い花（描き下ろし長編単行本）若木書房／ひまわりブックNo.362※PN＝はざまくにこ
7月　ジンロク「ガロ」／16P
7月　若い仲間たち（描き下ろし長編単行本）若木書房／ひまわりブックNo.374※PN＝はざまくにこ
8月　六の宮姫子の悲劇「ガロ」／15P
9月　それから／続・李さん一家「ガロ」／12P※PN＝つげ宛春
10月　栄光への脱出「ガロ」／19P
11月　狂人日記「ガロ」／16P

1968年

7月、多忙を極めていた水木しげるのアシスタントとして、調布の水木プロへ。背景などの作画を担当。仕事ぶりは真面目だったが、短期間で辞める。
暮れに高橋直行と出会う。

2月　マダム・ハルコ①悪徳の不幸「ガロ」／26P
3月　マダム・ハルコ②美徳の栄え「ガロ」／24P
5月　マダム・ハルコ③宇宙人国旅行記「ガロ」／35P

1969年

田無の清風荘に転居。このころから「ガロ」用に描いた作品が不採用に終わることが多くなり、喫茶店でウェイトレスのアルバイトをしながらマンガを描く。
11月、一人東京を離れ、実家のある高砂へ引き上げる。

3月　音「ガロ」／13P
6月　溝「ガロ」／15P
7月　壮烈無土国血戦記（上巻）「ガロ」／24P
8月　壮烈無土国血戦記（下巻）「ガロ」／32P

1970年

「ガロ」増刊号に作品を描き下ろすため上京。高橋の実家で「彼等」を描きあげる。

1月　アルマジロ「ガロ」／13P
7月　災難「ガロ」／16P
12月　彼等「ガロ増刊つりたくにこ特集」／49P

1971年

作品発表のペースは滞りがちとなる。通信教育で絵を習う。

8月　スケッチ「ガロ」／12P
12月　ジャムの壷「ガロ」／19P

1972年

10月、高橋と結婚し、京都市左京区元田中に転居。この年と翌年は、手描きの絵本作品を手掛けたほかは作品を描かず。

1973年

3月ごろ、原因不明の高熱が続くようになったため、病院で検査を受ける。
結果は膠原病の中でもっとも症状の重い不治の病・SLE（全身性エリテマト

ーデス)。半年間入院の後、京都市左京区狭間町に転居。

1974年

再び「ガロ」に作品を発表するようになる。病状は緩急を繰り返しながら相対的に悪くなっていった。

4月　僕の妻はアクロバットをやっている「ガロ」/14P
5月　ロビンソンクルーソーの7度目の漂流「ガロ」/13P
7月　MONEY「ガロ」/18P
10月　憂子の日々「ガロ」/16P
11月　空は青空雲一つ「ガロ」/7P

1975年

1月　MAX「ガロ」/26P

1976年

12月　トン、トン、お姉さん…「ガロ」/10P

1977~1978年

病状が悪化。衰弱と発熱が激しく、実家のある高砂の市民病院に一年間入院。このため、マンガ作品はまったく描けず。

1979年

青林堂より作品集が出版される運びとなり、再び「ガロ」にマンガ作品を発表するようになる(しかし病気で本人の握力がなくなっていたため、このころ発表された作品は実際は発病以前に描かれたものも多かった)。「ガロ」編集長・長井勝一が宇治の家を訪ねる。つりたと同じく60年代の「ガロ」でデビューした勝又進、佐々木マキとも再び交流が始まる。

9月ごろ、病室で「フライト」を描き上げ、集英社の新雑誌「ヤングジャンプ」の創刊を記念して設けられた「青年漫画大賞」に「風木繭」のペンネームで応募。結果は佳作入選。病院は富田病院~宇治ユニチカ病院~京都第一赤十字病院と転院。

4月　墓「ガロ」/2P
6月　巡礼「ガロ」/9P
7月　夜が……「ガロ」/18P
8月　ある亀の話「ガロ」/6P
10月　住人「ガロ」/29P

1980年

病状が悪化するなか、「フライト」が「ヤングジャンプ」に掲載される。「ガロ」にも作品を発表。

3月　フライト「ヤングジャンプ3月6日号」(第5号)集英社/24P※PN=風木繭
7月　おにごっこ「ガロ」/17P
12月　海蛇と北斗七星「ガロ」/12P

1981年

引き続き「ガロ」に作品を発表。作品の構想も多数得る。しかし、病状はさらに悪化。82年以降マンガを描くことはできなかった。

2/3月　アール「ガロ」/8P
4月　ディオゲネス「ガロ」/19P
5月　極寒「ガロ」/22P
7月　達人「ガロ」/4P
11月　帰路「ガロ」/7P

1985年

6月14日、入院先の京都第一赤十字病院にて死去。享年37歳。

執筆文献、イラスト

※【「タイトル」(種別)「初出」(初出が単行本の場合『』)発行年月日・出版社】で表記。

「作者のぺいじ」(文章とイラスト)『星からのお客さま』66年11月刊・若木書房※PN=はざまくにこ

「おわび」(文章とイラスト)『若い仲間たち』67年7月刊・若木書房※PN=はざまくにこ

「無題」（文章）「小さな世界」67年1月刊・同人誌
「私の抱負」（文章）「ＣＯＭ」68年1月号・虫プロ商事
「虫ぼし」（イラスト）「ガロ増刊つりたくにこ特集」70年12月刊
「表紙絵」（イラスト）「ガロ」81年4月号
「無題」（イラスト）「マンガの鬼」97年10月刊・青林工藝舎

参考文献

「彼女について私が語る二三の事柄」（文章）柚木加非（「ガロ増刊つりたくにこ特集」70年12月刊）
「パンの耳を」（文章）上野昂志（「ガロ増刊つりたくにこ特集」70年12月刊）
「悪友の友」（イラスト）ふじのたかこ（「ガロ増刊つりたくにこ特集」70年12月刊）
「カット」（イラスト）／ふじのたかこ＋久家三夫（「ガロ増刊つりたくにこ特集」70年12月刊）
「溝クイズ」（イラスト）／桜井昌一（「ガロ増刊つりたくにこ特集」70年12月刊）
「噂の女」（マンガ）／勝又進（「ガロ増刊つりたくにこ特集」70年12月刊）
「やっぱり漫画の面白さは〈つりたくにこの面白さにふれて〉」（文章）大槻純子（「漫画主義9号」72年3月刊・同発行所）
「追悼・つりたくにこ」（文章）長井勝一（「ガロ」85年9月号）
「つりたくにこの事」（文章）上野昂志（「ガロ」85年9月号）
「つりたくにこさん」（文章）水木しげる（「ガロ」85年9月号）
「つりたさんの死」（文章）永島慎二（「ガロ」85年9月号）
「マンガを描いていた彼女」（文章）佐々木マキ（「ガロ」85年9月号）
「あのジャズ喫茶店のこと」（文章）林静一（「ガロ」85年9月号）
「フライト」（文章）勝又進（「ガロ」85年9月号）
「早すぎた才能」（インタビュー）長井勝一（「ガロ」92年11月号）
「つりたくにこの作品」（文章）米沢嘉博（「ダ・ヴィンチ」97年7月号・メディアファクトリー）
「つりたくにこと楠勝平」（文章）（「ガロ」97年8月号）
「永遠への飛翔　つりたくにこ編」（文章）斧田小（「マンガの鬼ＡＸアックス2、3、5、6」98年4～12月・青林工藝舎）
「ＭＯＮＥＹ作品解説」（文章）斧田小（「マンガの鬼ＡＸアックス7」99年2月刊）

作品集リスト

「ガロ増刊つりたくにこ特集号」（70年12月／青林堂／Ｂ5判234Ｐ／定価200円／解説文は「参考文献一覧」を参照）
彼等／風と共に去りぬ／福の神／こんな話／女／アンチ／ジンロク／六の宮姫子の悲劇／栄光への脱出／マダム・ハルコ／溝

「六の宮姫子の悲劇」（79年3月／青林堂／Ａ5判上製240Ｐ／定価1200円）
六の宮姫子の悲劇／ジンロク／マダム・ハルコ／ナンセンス／アンチ／音／女／ＭＡＸ／ＭＯＮＥＹ／ジャムの壷／彼等

『北斗七星と海蛇』（88年12月／発行・高橋直行／製作・青林堂／Ｂ6横判上製48Ｐ／限定500部／定価2200円／※オールカラー絵本）
北斗七星と海蛇／アール／のぞき穴／タマゴ3題／赤い花影の小娘

○年譜作成・浅川満寛（青林工藝舎・劇画史研究会）
※協力（50音順・敬称略）…赤田祐一・大西己・芝門・想田四・高橋直行・藤野孝子・三橋乙揶

Limited Edition

No. 0059/1,000

彼方へ
つりたくにこ未発表作品集

2001年6月14日　限定1000部発行

著　者：つりたくにこ

発行者：手塚能理子
編集者：浅川満寛

発行所：株式会社青林工藝舎
〒166-0006
東京都新宿区舟町12番地ヴィレッジ多賀305
TEL／03-3352-0471（営業部）
03-5363-5920（編集部）
FAX／03-5363-5919

©Naoyuki Takahashi 2001 Printed in Japan

本書は2001年5月29日～9月2日、神奈川県川崎市市民ミュージアムにおいて開催された「楠勝平・つりたくにこ／２人の軌跡」展を記念して出版されたものです。
定価はカバーに表示してあります。
落丁本、乱丁本はお取り替えします。
ISBN4-88379-084-3 C0979